

災害に備えて平時からの備えを共に考える—Psychological・Zero・Aid

○田中浩二（金沢大学）、大川貴子（福島県立医科大学）、池田智（第一薬科大学）、
岩切真砂子（慈圭病院）、大江真人（金沢医科大学）、
木下将太郎（トキノ株式会社訪問看護ステーションみのり）、高谷新（山形県立保健医療大学）、
長田恭子（金沢大学）、服部希恵（日本赤十字社 愛知医療センター名古屋第一病院）、
福田紀子（慶応義塾大学）、藤代知美（四国大学）、山岡由実（大阪医科薬科大学）

本学会は、2011年3月の東日本大震災直後から災害支援事務局を発足し、同年6月に災害支援特別委員会を設置して、「精神科病院で働く看護師のための災害時ケアハンドブック」「COVID-19の対応に従事する医療者を組織外から支援する人のための相談支援ガイドライン」などを作成しました。

災害対策委員会では、2021年度より災害に備えた平時からのネットワークづくりに向けて、意見交換会を実施してきました。そこでは、精神看護専門看護師、看護系大学等の教員、看護管理者、それぞれの立場から災害に備えてネットワークづくりをする上での現状と課題について共有されました。それらの意見を踏まえ、災害対策委員会では、災害時のメンタルヘルス支援に関わる研修プログラムを開発し、その普及啓発を目的とした講習会を通じて本学会会員間の災害に備えた平時からのネットワークづくりを図ることを目的とした活動に取り組みました。災害が発生初期の“First”よりも前の段階、すなわち何も起きていない平時を“Zero”と捉え、この研修プログラムを“Psychological・Zero・Aid”と呼ぶことにしました。本プログラムは、災害がメンタルヘルスに与える影響の理解の促進と、発災時における「支援力」と「受援力」を高めることをもねらって構成しています。

第35回学術集会では、2024年1月の能登半島地震から1年経過した中で、本ワークショップを開催しました。多くの皆様にご参加いただき、急性期のみならず、中長期的にも住民や支援者のサポートを継続するために、平時からのネットワークをはじめ、「支援力」「受援力」を高めることの重要性が話し合われました。

第36回学術集会でも、“Psychological・Zero・Aid”

のワークショップへのご参加が、災害に備えて「支援力」や「受援力」を高めるための機会となり、ディスカッションの時間を通して参加者の皆様同士の“平時からのつながり”をもつきっかけとなり、災害への備えや支援に関する思いや経験を共有する機会となれば幸いです。